

連載

フィールド・アイ Field Eye

ノルウェーから——③

スタヴァンゲル大学 小野坂 優子

Yuko Onozaka



エガリタリアン均衡への「力」

私は、ノルウェーとアメリカとのびっくりするような労働環境の違いを経験してから、経済学に加えて「コンテキストが大事!」という社会学の文献も読み始めました。その中でも、特にエスピン-アンデルセンの家庭内分業の均衡の理論は、自分自身の経験から大変納得させられました。ここでは *European Sociological Review* に発表された Esping-Andersen et al. (2013) を参照したいと思いますが、図はその論文をもとに私が作ったものです。彼らは、各家庭が生産活動の様々な役割を夫婦間で分割するにあたり、伝統的と男女平等（エガリタリアン）というふたつの均衡があるといます。ノルウェーを含む北欧諸国はエガリタリアン均衡に属し、スペインなどのコンサバティブな国は伝統的均衡に属します（日本もここでしょう）。どちらも言えないイギリスのような国は「不安定」な状態にあり、伝統的、男女平等、どちらの社会規範も絶対的な影響力を持っていない状態です。さて、均衡というと、その場所に行こうとする「力」が働くわけですが、そんな均衡の力に引っ張られて伝統的均衡からエガリタリアン均衡に行くのが難しい様子を、図ではボールと斜面で表現しています。伝統的均衡に引っ張られる力は、社会が女性を「家庭係」、男性を「仕事係」として、そこからはみ出すと経済的、精神的な損害を被る仕組みになっているということです。ノルウェーに住む者としては、しかし、私は反対側の力、図で言うと、坂を上りきった後エガリタリアン均衡の方に転がり落ちていく力を身をもって感じるのです。この論文は descriptive で、因果関

係を明らかにするものではありませんし、私がアメリカからノルウェーに移ったのももちろん self selection です。しかし、引っ越しても、「私」という人間や家族環境、職種などは変わらないのに働き方が大きく変わったのは、それぞれの国の社会環境の違いと、この均衡に向かう力によるところが大きいというのが私の実感です。

まず、国としてノルウェーは、世界でも男女平等先進国として知られており、ノルウェー人はそれを誇りに思っていて、「私たちが世界の手本にならねば」という使命感のようなものを感じているような。なので、「これでは男女平等先進国として格好がつかない」というような状況になるべくなくそうとして、ますます男女平等が進んでいっているような気がします。ノルウェーの社会家族制度は、女性は労働市場、男性は家庭により進出してもらって、男女で仕事と家庭の負担割合がファイティファイティになるのを後押しする、というものです。結果、社会規範的にも、働ける年齢の女性が働いていなかったり、奥さんも働いているのに男性が家庭のことをしないのはいかかなものか、という雰囲気です。ノルウェーでは仕事と家庭を両立することが全く可能なので、母親であっても「働かない」という選択肢が大変選びにくい。裕福な主婦という人も存在しますが、経済的、社会的に成功している男性の奥さんは同じくらい経済的、社会的に成功していたりして、実際の専業主婦は非ヨーロッパ系の移民や健康が優れない女性が多くなっているケースが多いようです。ノルウェーの産休・育休制度は実際手厚いですが、両親とも働いていないと享受できない仕組みになっていますし、産休・育休後も子供の医療・教育は税金で賄われるので、子供がいないと、世界一高い税金だけ払いっぱなしでイマイチ恩恵を受けきらないような感じでした。社会として「働く大人と子供」という家庭でないと損なシステムになっているのです。また、日本だと、「保育園に預けるなんて子供が可哀想」と言う人もいますが、ノルウェーでは1歳から保育園に通って社会性を身につけるのがよいということになっており、保育園に通わせていないと「なぜ?」ときかれてしまう感じです。このような社会に住んでいたら、フツウの人はデフォルトとしてエガリタリアンな選択肢を選んでしまうと思われます。

ノルウェーはまた、世界に先駆けて会社の役員会に男女のクォータ制が導入された国ですが、ここにも、

ノルウェー自身による「世界の手本にならねば」という使命感が感じられます。この制度によって組織のダイナミクスがどのような影響を受けたか、など、私としては今後研究してみたいテーマです。男女のバランスというのは、私の勤める大学でも常に気にされているところで、各種委員会などは男女両方の教員を含むように配慮されています。女性の教授 (full professor) の数が少ないとなれば、様々なサポートが施され、私も教授昇進時にはかなりのサポート (とプレッシャー) をいただきました。そこにも、「男性教授だけでは進歩的でない旧体質な大学だと思われてしまう」という危機感があると思います。なんであれ、男女のバランスがとれていないと、何となく決まりの悪い思いをします (保育園の男性教員が少ないので増やせ、という議論もなされました)。

普段の生活においても、「女だから」料理をしたり「男だから」車の修理をしたりはしない。しかし、女性の方がより頻繁に料理をしたり、男性の方がより頻繁に車の修理をしているのも事実です。そのあたりは微妙で、男女の家庭内分業は性別で決めているのではなく、あくまでも「得意な方がする」という比較優位と、「できる方がする」という time availability で決定されている様子です。日本でもそうと言えばそうかもしれませんが、ノルウェーにおいて分業が落ち着く場所が随分違うのは、経済的、社会的、政治的、精神的なベクトルがエガリタリアン均衡の方に向かっているからのように思います。

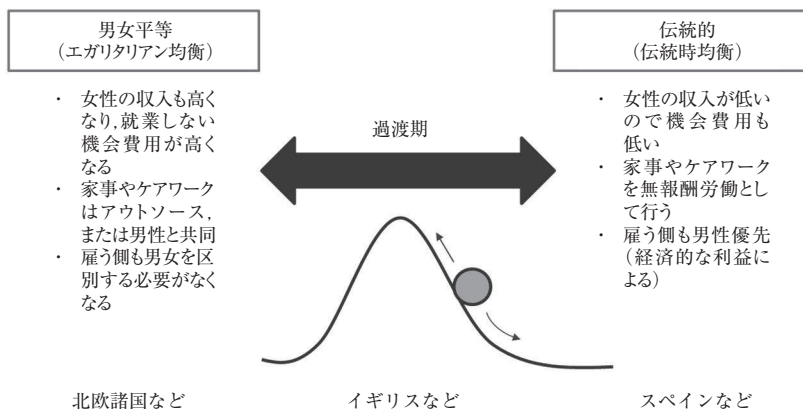
ではノルウェー人は性別を超えた境地にいるのか、といえば決してそんなことはなく、ノルウェーの女性は就業率は高いですが、パートタイムやパブリックセクターで働く人の割合が非常に高く、その結果男女の賃金差も存在します。しかし、ノルウェーにも、子供や家庭を優先させたい、出世やお金より生活とのバランスややりがいの方が大事、と考える女性も (男性も?) たくさんいるわけで、そういう人はパートタイムやパブリックセクターの仕事で自分に合った働き方を実現しているようです。パートタイムの仕事だからといって賃金のレートが低いわけではなく、ただ就業時間に比例しているだけです。共働きが圧倒的多数で、女性もまっとうな所得を得ているので、男性が家族を養わなければ、というプレッシャーもありません。ノルウェーは、人々が、各自のできる範囲で社会に貢献すれば、男だからとか女だからという規範にあまり縛られることなく、自分である程度フレキシブルに自分の人生をデザインできる社会であるように思います。

参考文献

Esping-Andersen, Gøsta, Diederik Boertien, Jens Bonke, and Pablo Gracia. 2013. "Couple Specialization in Multiple Equilibria." *European Sociological Review*, 29 (6) :1280-1294.

おのざか・ゆうこ スタヴァンゲル大学ビジネススクール教授。最近の著作に“Household Production in an Egalitarian Society,” *Social Forces*, forthcoming. 環境経済学, 応用計量経済学専攻。

図 男女の家庭内分業の均衡



Esping-Andersen et al. (2013) に基づき著者作成。